

第104回日本精神神経学会総会

シンポジウム

DV ——子どもへの影響——

笠原 麻里 (国立成育医療センターこころの診療部育児心理科)

Domestic violence (以下DV) の起きている家庭の暴力的な出来事は、たいていの場合外部から知りえることはできず、家族内で隠蔽されていることが多い。その中に育つ子ども達は、他の子ども虐待と同様あるいはそれ以上に、夫婦間の暴力的関係について語らないものである。したがって、子ども自身に身近に接している教師や友人の親などによっても、家庭内の混乱状況は気づかれにくく、また子ども自身も明るく「いい子」に振舞ったりしているために、SOSのサインすら乏しいこともしばしばである。しかし、DVに付随する子どもへの心理的影響は大きく、家庭生活における安全が保たれない日々の中では心身の発育発達にも大きく影響が及ぶ。さらに、子ども自身への虐待、特に性的虐待が潜む可能性など、重大な問題が潜んでいる場合もある。今回、DV家庭で育つ子どもの精神医学的問題について、精神発達の観点を踏まえて検討を行った。幼児期、学童期、思春期の各年代の発達課題に焦点を当て、

被害を受けている世代ごとの子どもの精神医学的問題の特徴および母子関係の問題について考察した。臨床群においては、各年代の精神発達課題における葛藤や混乱は著しく、場合によっては不登校や引きこもりなど、一時停止状態に追い込まれる場合も少なくなかった。また、DVによって傷つけられた母子関係では、例えば乳幼児期の子どもの身体的ケアすら困難になるなど、各年代とも養育に直結した重大な問題を生じる可能性が示された。尚、本発表において用いた診療情報は、すべて通常診療の範囲で得られており、患者に研究上の負担はない。さらに、国立成育医療センター診療情報2次利用の許可申請により、許可を得た情報のみを用いて分析し、解析に際しては氏名、カルテ番号、住所等の個人情報はいずれも、全て研究IDに置き換えた上で行い、患者のプライバシーは保護されている。

(この論文は抄録集より転載しました)